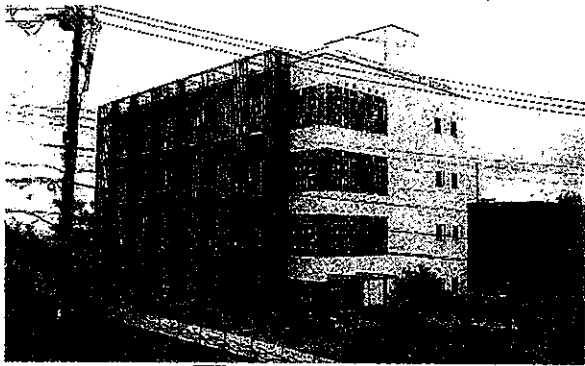


「彩都」でバイオ育つか



10月の開設を目指して建設が進む、2棟目のバイオベンチャーの研究棟

大阪府北部の大規模ニュータウン「彩都」。その全体計画は大幅に縮小されるが、すでに街開きした地域には、約30社のバイオベンチャーが進出し、大学などと連携しながら研究を進めている。事業は花開くのか。彩都を訪ねた。

(堀田浩二)

ベンチャー約30社

研究室にあるプラスチック製のケースに、数十匹のマウスがいた。照明を落とし、その中の1匹に特殊な光を当てると、下腹部あたりが数カ所、光る。

「これは彩都・西部地区の研究棟に入る米系ベンチャーのアンチキヤンサージャパン。そこが、がんです。肉眼で見えるんです」。八木滋雄社長が光る部分を指さした。クラゲが光る原理で作った蛍光たんぱく質を、がん細胞に組み込んでいる。アンチキヤンサー「技術」を使えば、がんの転移も肉眼で観察できる。親会社の創業者が、たとえば肺がんならマウスの肺に「同所移植」すれば、転移の実験ができる。発見、移植の手法は特許化し、製薬会社に技術提供しているのだ。

彩都 大阪府茨木市と箕面市の丘陵地743ヘクタールに、バイオテックノロジー関連の研究機関や住宅を整備する計画。西部、中部、東部の3地区に分かれ、東部などでは計画が行き詰まっている。

先行して開発が進む西部地区の「ライフサイエンスパーク」22区画は、国の医薬基盤研究所やがん専門病院が集まる。研究棟は中小企業基盤整備機構などの出資でつくられた「公設民営」施設。今年10月に2棟目が完成する。

「地の利もある。たとえばアンチキヤンサーの日本格納は07年4月、阪大医学部や国立循環器病センターなどが近くに集まる彩都を拠点に選んだ。すでに阪大医学部が、同社の光るマウスで研究を進める。八木社長は「近くに研究者が多く、アイデアも得やすい」と話す。阪大先端科学イノベーションセンターの兼松泰男教授も「彩都の役割の1つは、大学の研究成果を実用化させること」と話す。

ただ、大学の実験の一部をベンチャーが請け負ったり、逆に大学が請け負ったりする連携は、欧米のように進んでいない。阪大は今年4月に「産学連携推進本部」を設置。こうした問題に本腰を入れた。

企業名	設立年	事業内容
エスMG	99年	遺伝子治療薬の研究開発
アンジー	01年	抗体医薬開発
インターデザイン	00年	遺伝子研究に関する受託研究
ジェノミクス	02年	ドラッグデリバリーシステムの技術開発
ジェノラック	01年	乳酸菌製剤によるワクチン開発
セラパリアーズ	07年	たんぱく質解析の研究開発
総合医科学研究所	94年	機能性食品の臨床評価
メド・ソリュション	03年	再生医療材料の開発
メド・ソリュション	03年	臨床試験支援

研究棟に進出した企業の得意な分野は様々だ。表。府や茨木市から家賃の半額補助などがあるほか、医療用廃棄物の処理システムも整っていることから、比較的早く研究棟は埋まった。

新研究棟の建設も始まっている。製品化を支援するた

大阪府は彩都を含めた府北部を国の「先端医療開発特区」の指定先として申請しようとしている。研究に対する補助金や臨床試験の優遇措置などが得られる。

こうした後押しが、資金面で脆弱なベンチャー企業の支援につながるかどうか、成功の力手を探る。